ここから永遠に

福本勝美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ここから永遠に

【Ｎコード】
Ｎ０５９６Ａ

【作者名】
福本勝美

【あらすじ】
思い出とは。。過ぎ去った遠い記憶へ・・・

第一部

ここから永遠に

序章

過ぎ去った時というのはもう戻らない。それが楽しい日々であったとしても。
そして人は、もうどうしようもないと知りながら時に遠く過ぎ去った日々に思いを馳せる。
人生はまるで未来へ遠く続く一本道のようでありながら、時として遠い過去へ触れる時もある。
そして、かつて見出すことができなかった答えに近づく時がある。

一

僕が住むマンションは吹田にある。尼崎の会社へは車を使って通勤している。
梅雨が明けたとはいえ今日も蒸し暑い一日だった。雨は降らなかったが陽は差さず、とても快適とは言えない陽気だった。
暦の上では夏だろうが、まだ雨がちょくちょく降りそうだ。
僕は仕事を終えると、エアコンの効きの悪いぼろセダンを走らせて帰宅した。

うちは妻の洋子と、子供はまだちいさい娘がひとり。どこにでもいそうなサラリーマン家庭だ。
ようやく育児がどうのという問題も解決し、まあ、周りからみれば、平凡だが幸せそうな家庭に見えるのだろう。
まあ、普通というのがいちばんなのかもしれない。

自宅に着くと娘はもう寝ているようだった。僕はいつものように「ただいま」と言い、洋子もいつものように「おかえり」と言ったきり特に話すこともなく、ネクタイを外して、リビングに置かれた布製のソファーに腰掛けた。

目の前に置かれたガラスのテーブルには、洋子が買ってきた女性誌、娘の絵本に新聞と、今日届いた郵便が無造作に置かれていた。

クレジットの明細、折り込みのスーパーのチラシに、どのみち開けずに捨てるだろう広告の封筒のたぐいが散らかっていた。

キッチンからは、がちゃがちゃと洋子が食事の用意をする音が聞こえた。僕はなにをするでもなく、ただ無意識に新聞の上に置かれたテレビのリモコンを手に取ろうと手を伸ばした。

と、そのとき、印刷ばかりの郵便物の中に一通の手書きの葉書があることに気がついた。

宛先は小さな女性の字で書かれていたが、書かれているのは僕の実家の住所だ。

差出人を見ると「藤村恭子」と書かれているだけだった。

僕は記憶の中からその名前を引き出していくうちに、胸に大きな衝撃を受けたような気がした。僕はただ呆然と葉書の内容に目をこらしていた。

一一暑中お見舞い申し上げます。

お元気ですか。

今とても幸せです。私、あの日から永遠なものを見つけました。――

水色の朝顔の花が印刷された私製葉書には、ただそれだけが書かれていて、切手には「御荘郵便局」という消印が押されていた。

僕が葉書を眺めていると、洋子がそれに気づいたのかキッチンから出てきて、「それ、お母さんが持ってきてくれてん。誰から？」と聞いた。

僕はとっさに平然を装い「大学のときの友達や」と言った。

それからしばらく考えると「この子このあいだ結婚したらしいわ。」と答えた。

洋子は「ふーん」といっただけで、それ以上詮索しようとはしなかった。

僕は動揺を隠すようにその葉書をテーブルに放りなげ、食事と風呂を済ませると、さっさと布団へ潜り込んだ。洋子はすぐに寝息を立てはじめた。

恭子・・・そう、恭子。どうして今になって彼女から葉書が来たのか解からなかった。そして「あの日から永遠なもの」という言葉が、僕の記憶の中にかすかに見え隠れするのを感じた。

僕は忘れかけていた学生時代の記憶をそっとたぐっていった。

彼女が書き綴った言葉が、僕の記憶を映画のように鮮やかに甦らせていった。

二

今からちょうど１０年前、たしか3年の夏休み前のことだった。僕は西日のさす鶴橋の駅から、発車間近の満員電車に駆け込んでいた。連日雨が続いてうんざりしていたのだが、その日はめずらしく午後から雨があがり、久しぶりの太陽を見ることができた。
僕は走り出した列車の窓から、通り過ぎてゆくホームの天井に吊り下げられた時計を見ていた。大急ぎで大阪駅の待ち合わせ場所へ行かなければならなかった。

途中、夕陽が大阪城の木々の緑に反射して眩しかった。天守閣の屋根はそれに合わせるように鮮やかな緑笙の緑色を見せていた。
あの日は週末だったので列車はキタへ遊びに出掛ける若いカップルやサラリーマンでごった返していていた。

あちこちで聞こえるがやがや楽しそうな話し声や、駅の自動音声や列車の振動が、西日に映える列車のオレンジ色などと折り重なって、大阪環状線の週末の夕景を賑やかに描き出していた。
僕は右手で肩からザックが落ちないようにストラップを握り、左手で人の手で脂っぽくなった吊り輪を握って、通り過ぎる夕景の、工場やビルディングのひとつひとつを目で追いかけていた。
列車が上下に揺れるたびに肩や背中に重くのしかかるザックの中には、Ａ４サイズの大袈裟なカバーの付いた経済学の本とノート、折りたたみ傘と、まるめたデニムジャケットが詰め込んであった。

僕はそれを足下に降ろすと、のろのろと走る列車にため息をついて、また窓の外を眺めた。
きらきらと夕陽を受けて、黄金色に光る川の水が通り過ぎていった。
大阪駅へ着きドアが開くと、僕は真っ先にホームを駆け始めていた。

プラットホームは、やや涼しくなり始めた時間とはいえ、大勢の人々が行き交い、熱気にあふれていた。大きなバックを抱えている観光客らしい一団や、中年のサラリーマンや、薄着の派手な化粧の若い女性たち。
そこへ今到着した列車の群衆がなだれ込み、下り階段から改札へ向かう通路は人の川の大きな流れになった。
この駅はなぜか、僕にはいつも同じ光景に見える気がした。
中央口に通じる階段の前には四畳ほどの広さのキオスクがあり、その前に、業務を終えたどこかの会社の新入りたちだろうか、スーツ姿の五、六人の男女の一団が、売り物の丸められた新聞紙の一面を指さして笑ったり、肩をつつきあったりしていた。

僕はその横を通りすぎると、人の流れを避けて、階段の前まで駆け足でやってきた。それまで僕は、だいたいいつも時間厳守だったが、その日に限って学校で、来年の就職活動のことや、前期試験の範囲のことやいろいろと話をしていて、つ
いつい遅くなってしまっていた。
僕は恭子を待たせているのがとても気になっていた。彼女はもう来ているだろう。

約束の時間を１０分ほど過ぎていた。

人を待つのに１０分は長い時間だろうか、それとも短い時間だろうか、そんなことを気にしながら、中央口に続く階段を人混みをかきわけながら早足に駆け下りていった。
僕はたくさんの広告ポスターが壁に貼られた通路から、さらに低くなっている改札口の前の階段も駆け下り、リー・ライダースのコインポケットから切符を取り出し改札員に手渡すと、中央口の広い駅構内へ踊り出た。
駅舎の中に作られた噴水の周囲は、人待ち顔の大勢の若者達で賑わ

っていた。
八角形に縁取られた噴水の一角には模造の大きな木があり、その前まで駆け足で回り込んで行くと、すぐとなりにある小物屋かなにかの硝子のウィンドウの前で、僕は恭子を見つけた。

彼女は僕に気が付くといつもの笑顔を見せた。僕は軽く手を合わせるしぐさをして、「ごめん。遅れた・・・」と言った。
彼女は、ちいさなバッグを持った左手の手首に右手をそっと重ねるような仕草すると、ややうつむき加減に、
「今日、忙しかったん？」と聞いた。
「学校で試験の話しとってん。おまえなんで今日こうへんかったん？」
僕がそう聞くと、雑踏のなかの二人に僅かな沈黙が訪れた。
僕は次の言葉を考えながら、彼女の薄いピンクのブラウスと彼女の細いうなじを見つめていた。

彼女の装いの中にある着こなしは、彼女が生まれついてここで暮らしてきたような印象をあたえていたが、彼女が話す言葉の中にあるやさしいイントネーションには、どこか、ここではない遠い土地の人という印象があった。

彼女の洗い晒しのジーンズは、彼女の太股の柔らかなカーブを美しく浮き上がらせて、穏やかで暖かい印象を演出していた。

「あほちゃうんか、単位取れんかったら、おまえ卒業できんようになんぞ。」
僕は優しく諭すように言った。きっとどう話を切り出していいのかわからなかったからそんなことを言ったのだろう。
彼女は僕の胸のあたりを見つめて、「うん」と頷いた。

駅舎の天井をガタンゴトンと大きな音をたてて電車が通り過ぎていった。僕は、彼女のその反応が「解ったこれから気をつけるよ」という意味なんだと思ったが、「もうどうでもいい」っていう意味にも取れて、なにかしら気になるものが残った。

僕等は駅舎を出ると、行き交う大勢の人々の流れを避けながら、阪急電車のりば方面へ通じる大きな横断歩道を渡り、それから、阪急梅田駅へ通じている「動く歩道」に飛び乗った。
僕は移動している歩道の上をさらに歩くつもりだったが、彼女が立ち止まったので、しかたなく彼女の前で歩道の手すりに背中からもたれかかって、流れる景色と彼女を交互に見ていた。
恭子と僕は、2年のはじめに同じ大学で知り合った。同じ学部で学んでいたが、経済学なんて、ただなんとなくで、僕も彼女もそれほど興味があるわけではなかった。
知り合った頃の彼女は、垢抜けない地味で目立たない子といった印象だった。それでもお互い興味のあったことや、話題が合ったのだろう、今年の3月に僕等は友達を卒業して恋人同志としてつき合うようになっていた。

僕は恭子を見ていた。背景を通り過ぎていく百貨店の広告看板も、通路を行き過ぎる人々も僕にはカメラのレンズを通すように大きくぼけて、ただ最近口数が少なくなった彼女の、美しく成長した姿だけがはっきりと見えているだけだった。

日々輝きを増していくような、彼女のやさしさの中にある飾らない美しさは、いつか自分のものでなくなってしまうような気がして、僕は胸を締め付けられるような切なさを感じた。

僕等が歩道の終わり近くに差し掛かったころ、彼女は手すりに置いた自分の指と僕を交互に見ながら、

「あんな、今日な、仁史に話したいことがあってん。」と言った。
僕は、「どうしたん？」と聞いたが、彼女の話を聞く間もなく歩道が終わった。
僕は先に降り、彼女はそれに続いた。
彼女は僕の歩調に追いつくように静かに二、三歩駆けると、僕の背中に向かって「あとで話すわ。」と言った。
それから、阪急電車の乗り場の近くにある、地下街に続く階段を降りた所にある喫茶店に僕等は入った。
店の中は、白い壁の部屋に大小のニス塗りの木製のテーブルが二十ほどあり、このあたりにしてはめずらしく落ち着いた雰囲気が漂っていた。
僕等はマホガニー色に塗られた四人掛けのテーブルに無言で向かい合って座ると、店員が注文を取りにくるのを待った。バックには場違いな洋楽が流れていた。
やがて、白いシャツに黒いジーンズ姿の女性店員がメニューを持ってきた。僕はアイスコーヒーと、彼女はアイスオーレを注文した。
僕はおしぼりや、それを包んでいたセロファンの袋をテーブルの上に散らかすと、肘をテーブルについて指をくんで、なにげなく店内を見回していた。
しばらくの間沈黙が続いていたが、彼女は一瞬僕の顔を見て、そしてまた目をそらすと、
「私、夏休みに入ったら、しばらく実家に帰んねん。ちょっと家の用事があんねん。」と言った。

僕は彼女にどうかしたのか聞こうとしたが、ちょうどその時、先ほどの店員が二本の細長いグラスに注がれた、黒とベージュ色のよく冷えていそうなコーヒーを持ってきた。

彼女は、運ばれてきたグラスの氷をストローでかき混ぜながら、ややうつむき加減の表情を見せていた。
彼女の繊細な指の間から涼しげな音が響いて、どんどん暑さを増していく大阪の街の中でそこだけがオアシスのように思えた。
「どうかしたんか？」
僕が聞くと、彼女は指をとめ、
「ううん。別に。だいじょうぶ。」と言った。
「そっか、おまえ実家どこやったっけ？」。僕が聞くと彼女は、
「前にゆうたやん。瀬戸内海の小豆島やで。」となぜか僕に目を合わせようとはせず、鈍く光るマホガニー色のテーブルの一点だけを見つめて答えた。

僕は小学生の頃から地理が苦手だったが、それでも頭の中でいい加減な形の本州と四国を思い出し、その二つの陸地の間あたりにある小さな島を想像した。

「そっか・・」

僕はしばらく会えなくなると思うと淋しかったが、彼女は、僕の気持ちを察したのか、
「でも電話するから」と明るい調子で言った。

僕はそれ以上彼女自信の事や、まして実家のことまで詮索するのは良くないと思ったので、「わかった」とだけ答えた。

僕等はそれから話題を変え、学校のことや、新作の映画の話や、友達の失敗談や、とりとめのない話をしてふたりで笑った。

すっかり長居して店を出ると外はすっかり暗くなっていた。僕等は交差点を渡り、若者たちでごったがえしている東通り商店街の中にある居酒屋へ入った。

そこで夕食を摂ってビールを飲んだが、とりとめない笑い話はそこでも続いた。
帰り際、彼女は酔って足取りがふらついていた。僕は彼女のブラウスの肩に腕を回し、自分の胸に抱き寄せるように大阪駅に向かって歩いた。
彼女は気持ちよさそうに、甘えるように僕の肩に頭を乗せていた。
僕はなぜか、せつなくて不安な気分になって、ずっと彼女が自分のものであってほしいと思った。

夜の東通り商店街はその日も遅くまで賑わいを見せていた。ゲームセンターの喧噪や、居酒屋やカラオケの色とりどりの照明やネオンが僕等を包んでいた。
僕は、彼女が他の人間にぶつかったりつまずいたりしないように、優しくかばいながらゆっくりと歩いた。

そういえば、彼女とつき合い始めた頃、僕等は学校をさぼって大阪城に行ったことがあった。
その帰り、夕暮れの大阪城公園の駅で彼女が住んでいる福島の駅へ向かう内周り電車をホームのベンチで待ってる時、僕は始めて彼女の肩を抱いた。たくさんのサラリーマンが帰宅の途に着く頃、電車は次々に到着したが、彼女は、次のを待つ、次のを待つ、と言ってずっと僕に抱かれていた。
僕はそんな彼女の、健気に僕だけを想ってくれて、こうやって安心

して僕に抱かれている愛らしい姿を見ていると、いっそのこと今夜彼女を部屋に帰さず、このまま一緒にいようかと思ったりした。それでも駅が近づくにつれ、彼女の足取りはしっかりとしてきたので、今日は帰してゆっくり休ませようと思った。
大阪駅に戻る途中、すでに営業を終えた灯りの消えた百貨店のショーウィンドウの横の、人目につかない一角で、僕は恭子を抱きしめた。それから右手の親指を赤く染まったやわらかな頬に押し当てて、手のひらで細い首筋を包むようにして唇を重ねた。リードされるままに瞳を閉じた彼女の奪われた唇から、小さな喘ぎ声がもれた。

彼女の髪の匂いや、息づかいや赤くほてった頬の熱や、それになんとも言えないせつなさが僕の中にひろがった。
「好きよ・・」僕よりも先に、艶を帯びた細い声で彼女は言った。
「俺も大好きや」僕は優しくそういうと、もういちど彼女を強く抱きしめた。
どこかの居酒屋の広告が風でさらさら音を立てながらと飛ばされていった。
御堂筋を行き過ぎるヘッドライトは川のように絶えず黒いアスファルトの上を流れて、街灯の明かりが僕等をやさしく包んでいた。梅雨の蒸し暑い空気は、彼女の首筋をうっすらと湿らせて優しい香りを漂わせていた。僕等は光の川の中に沈んでいくような錯覚の中で、お互いの気持ちを確かめあっていた。

彼女は「ひと駅やからだいじょうぶ」といったが、僕は内周り電車で彼女を福島の駅まで送り、そのままぐるりとまわって鶴橋駅まで戻ることにした。彼女の部屋は福島駅から１０分ほどのところにあったが、僕は、恭子が酔った足取りで一人で歩いて帰ると思うと、たとえ１０分でも長い時間に思えて気になったので、「おまえ、今晩電話してこいよ。」と言った。
僕等が乗った列車が福島駅に近づくと彼女は、

「今日はありがとう。」とまた頬を赤くして言った。

彼女が降り、ドアが閉まって列車が動き出すと彼女の姿は視界の左の方へ流れて行った。彼女は僕に笑顔を見せて、指先を軽く振ってみせた。僕は早足で彼女に近づこうとしたが、5、6歩歩いた所で連結器のドアに阻まれ、彼女の姿は見えなくなった。

僕は揺れる車内のドアの横に取り付けられたステンレスの長い手すりによりかかり、窓の外の夜を見ながら、今日あったことをいろいろと思い出した。

実家に帰るという彼女の言葉がなぜか気になっていた。

夏休みに実家に帰るというのはとりわけ不思議なことでもないのだが、彼女の家族になにかあったのではないだろうかとか、詮索しまいとしても気になってしまうのだった。

それに、彼女はたしか、話したいことがあると言っていたが、そんな単純なことだったんだろうか。

そんなことを思いながら硝子に映った自分の姿をぼんやりと見ていた。

車窓をきらきらと新世界の灯りが流れていった。赤、白、青、黄色、さまざまな色どりのネオンや道路の街灯は、車内の冷房で薄く曇った硝子を通してひとつひとつが光の円と放射状の光を放っていた。

僕は、鶴橋から近鉄線に乗り換え生駒の自宅に帰った。

留守番電話に伝言が残されていた。

「今日はありがと、ちゃんと帰れました。」

彼女のやさしい香りと、彼女の体の熱さまでもが、まだ僕の腕の中に残っているようだった。

三

次の月曜日、僕は昼前まで寝ていたが、ごそごそと起き出すと午後の講義を受けるために学校へ向かった。

学校は大阪といっても、市内からはかなり外れた場所にあって、閑静な下町の駅の近くにあった。僕は学食で朝昼と昼食を兼ねた食事を摂り、午後の眠い講義を受けた。

講義が終わると僕は、友人の明美と絵里子と一緒に外へ出た。
学校の正門へ続く商店街には、いかにもこの街らしい、下町の風情のある商店が軒を連ねていた。

学生相手の食堂や喫茶店もたくさんあり、たこ焼きや焼きそばを売る屋台まで出ていて、多くの学生で賑わっていた。

僕等は商店街を少しはずれたところにあるちいさな大衆喫茶に入った。
この喫茶店の向かいには、どこの下町にでもありそうな古い作りの玉突き屋がある。当時は玉突きが流行っていたので、そこそこの客が入り、いつも半分以上のテーブルで賑やかな笑い声がしていた。

僕は男の友人といるときは決まってそこへ通った。腕前の方は誰も似たり寄ったりだったのだが、それでも2時間ばかり、エプロン姿のおばさんの出してくれるコーラ瓶を片手に、すり切れたラシャの上で青や赤の玉を行ったり来たりさせて、
帰りにこの喫茶店に入るのが習慣になっていた。

店にはいると、開店休業のマスターは椅子に座って腕を組みながら、積まれた漫画雑誌の横に置かれたテレビで退屈そうにワイドショーを見ていた。

マスターは僕等三人を見ると僕に、「どなしたん、今日はもてもてやん」と言って笑った。

僕は明美からノートを借りると、それをザックに詰め込みながら、「ありがと。明日絶対返すから」と言った。

僕等はそれからコーヒーを飲み、いろいろと話し始めたが、話題はいつものように講義のことや、学校に関することから始まった。

途中で、マスターが割り込んできて、「今日はこれか？」といって玉を突く仕草をしてみせたので、「試験前でそれどころやないわ」と答えた。

話の流れが夏休みの予定のことになると、絵里子が思い出したように、

「恭子ちゃん、夏休みのあいだ小豆島の実家に帰るらしいわ。なんか家の用事らしいでぇ、彼女なんか最近おかしいなぁ」と言った。

僕が黙っていると絵里子はおしぼりを包んでいたセロファンを、自分の指にくるくると巻きながら、

「仁史、恭子ちゃんをちゃんとつかまえとかなあかんでぇ」と言った。

恭子は絵里子と仲が良かったので、彼女にはいろいろと話したのだろう。

僕は恭子のことを聞いてみようかと思ったが、他人から聞き出すのは卑怯だと思ったから、何も聞かずに黙っていた。

僕は週末の夜、恭子が言った「好きよ」という言葉を思い出していた。それは言葉として思い出すだけでなく、今でも彼女の熱い息づかいや髪の香りまでも、素晴らしい思い出として自分の中で再現することができた。

「だいじょうぶや。心配ないと思うで」僕が絵里子にそう言うと、彼女は笑いながら、

「わかれへんで。島に帰って、どっかのお金持ちと見合いするんか

もよぉ」と言った。
僕も笑いながら、「あほちゃうか、そんなわけないやん」と答えた。
それから何日かして、前期試験が始まった。
僕は、試験対策と夕方からの中華料理店のアルバイトに追われていた。何度かキャンパスで恭子と会ったが、彼女も忙しいようで二人だけで会える時間はあまりなかった。
それでも、夜は電話でその日あったことなどを話したりした。
ただ、今のように携帯電話を学生が持ってるはずもなかったし、実家の電話を使うと母親が、長い、長いとうるさく言うので、僕は仕方なく毎晩、生駒駅近くの、人通りの少ない通りにある電話ボックスまで歩いて行かなければならなかった。
それでも恭子と話している時は至福の時間であったし、話し終えて帰る道のり、僕は星空を見上げて恭子のことを想いながら歩くのが好きだった。
試験が終わって、夏休みに入った日から、恭子と連絡がとれなくなった。
いつものように彼女の部屋に電話をしてみたのだが、呼び出し音が鳴るだけで彼女の声は聞けなかった。
僕はたぶん実家へ帰ったのだろうと思って、向こうからかけてくるのを待つことにした。
４日目になるとさすがに心配になってきていたが、その日の晩になって彼女から電話がかかってきた。
「今、島に帰ってきてるねん。準備とかいろいろで連絡できひんかってん。ごめんね。」と彼女は言った。僕は、恭子と話ができる嬉しさでいっぱいで、「そっか。」と答えただけだった。
僕は、夏休みが始まってまだ４日目だというのに、中華料理店のア

ルバイトに昼間からかりだされている話をした。恭子は笑ってそれを聞いていた。

「そっちの様子はどうや？」と聞くと彼女は、
「今日は家でごろごろしててん。なんにもない島やし」と答えた。
僕は笑うと、「家の手伝いせんでええんか？」と聞いてみた。
彼女は、「うーん・・たまにはするかなぁ」と答えた。
僕等はお互いのことをしばらく話した。そして二人の会話がふっと途切れたあと、
彼女が突然「あのね、」となにかを言いかけた。
「ん？」
僕が聞くと、彼女は少し間をあけてから遠慮がちに、
「あのね、仁史くん、よかったら、うちの島に来てみぃひん？」と言った。
僕は、夏休みに入ったとはいえ、彼女の突然のバカンスの提案に内心驚いてしまった。それでも、それを悟られないように平然とした様子で、
「ええでぇ、ほないくわ」と答えた。

小豆島は瀬戸内海にあったが、大阪からだと結構距離があるはずだ。僕はまた、いい加減な形の本州と四国と島の位置を思い浮かべたが、どうやって行ったら良いのかさっぱりわからなかった。それでも神戸あたりから船に乗れば、せいぜい３０分くらいだろう、と見当をつけてみた。
しばらく考えてると、彼女はそれを察したのか、くすくす笑い、「あのね、岡山に”ひなせ”っていう港があるから、そこからフェリーでおいで。」と言った。
僕は岡山まで行かなければいけないのかと思ってまた内心驚いたが、再度平然と、「りょうかい。わかった。行くわ。」と答えた。

夏休みなんだし、旅行もいいだろう。少しくらい遠くても、島に行けばきっとほとんどは二人だけで過ごすことができるだろう、僕はそう思うとだんだんと嬉しさと期待がこみ上げてくるのを感じた。

次の日僕は駅前の本屋で地図をめくって小豆島を探してみた。実は神戸より西へ行くのは、中学校の修学旅行で九州の大分へ行った以来のことだった。

なにしろ、うちの母は奈良の出身で、父は金沢の出身だったので、瀬戸内海にある小さな島など、今まで何の縁もなかったし、行く必要もなかったのだった。

地図を見ると、神戸から30分くらいだと思ってた自分の間違いに気がついた。島は神戸どころか淡路島よりも遥かに西にあった。
僕は地図で、本州でもなく、四国でもない、両方の大陸が引っ張り合うような位置にあるへんてこな形の島を眺めながら、「あいつ、こんなとこ住んどったんか。」とつぶやいた。
しかし、もしかしたら恭子が産まれ育ったこの島は、もしかしたら楽園のような所かもしれないと勝手な想像をした。
地図の海上に引かれた線を追いかけてみると、小豆島へ行くフェリーはあちこちから出ているようだったが、僕は恭子に言われたとおり、電車で日生まで行き、そこからフェリーに乗ることにした。
「どうせ辺鄙な田舎の島で、たいしたことないに決まっている。」
僕はそう思い直すと、近所の高校の女の子達が芸能雑誌をあさってきゃっきゃ言っている横を通り過ぎ本屋を出た。

僕はアルバイト先に電話をして、島へ行く予定の日から4日間休みを取りたいと言った。

店長は今日は機嫌が良いらしく、いつにない優しい声で、「ええけど、そのあとはずっと入ってや。」と言った。
なんでも好景気の波に乗ってどこかの企業から転職してこの店を開いたという中年の店長は、生粋の大阪人のくせに料理の腕も接客にしても、商売はいまいちだった。機嫌が悪いとやたらと周りに八つ当たりするのは子供じみていた。それでもなにかと親切に若い連中の話を聞いたりする時もあるので、バイト仲間からの信頼は比較的に厚かった。
「はい」と答えると、彼は
「どっか行くんか？女と旅行でもいくんか？」と言って笑った。僕はバイト先で恭子の話をしたことはなかったので、彼の事を、勘だけは鋭い嫌なオヤジだと思った。

「日生に着いたら電話してぇ。」彼女はそういうと、実家の電話番号を教えてくれた。
僕は電話ボックスから出ると、いつものように空を見ていた。
低い灰色の雲がかかっていたが、予報では次の日は晴れるということだった。

僕は自宅に戻ると、目覚ましをセットして床に着いた。その当時流行っていた深夜ラジオ番組を聴きたかったが、その夜はあきらめて眠ることにした。

僕は布団の上に横向きに寝転がると、また恭子のことを考えていた。
「恭子ちゃんをちゃんとつかまえとかなあかんでぇ。」絵里子が言った言葉がなぜか枕元をちらついていた。
「ちゃんとつかまえてるやんか。」
僕はそう独り言を言うと、枕に顔を埋めた。
僕はあの夜の御堂筋の光の川の中にいた。
「好きよ・・」

僕がいちばん聞きたかった言葉だった。
僕はその言葉を鮮明に何度も何度も思い出そうとしていたが、思い出そうとするたびに記憶はどんどん色褪せてゆくようにも思えた。思い出なんて色褪せてしまうものなんだろうか。でも、それでも恭子は確かに僕のそばにいてくれる。いつも一緒にいられるのだ。いつかふたりであの時は楽しかったねって思い出せればそれでいいだろうと思った。
やがて眠気が波のように押し寄せて来ると僕の記憶も意識も、暗闇の川底に沈んでゆくように眠りに落ちていった。

四

翌朝、僕は目覚まし時計の電子アラームが鳴り始める前に目覚めた。その当時、僕の部屋は実家の2階にあった。その数年前までは一階の狭い部屋で寝起きしていたのだが、兄貴が出て行ってからは、その部屋を自分の部屋にしていた。
特に趣味があったわけでもなかったし、雑誌とテレビ以外なにもない部屋だった。
僕は煙草のやにで汚れたカーテンを開くと、サッシをいっぱいに開いて朝の景色を見渡した。何もない部屋だったけど、眺めだけはいい部屋だった。
家の前には早くも向かいのおばさんがを道路をせっせと掃いているのが見えた。
彼女が腕を動かすたびに、アスファルトからはざっざっと乾いた音が聞こえた。
部屋の中に涼しい朝の匂いが舞い込んで、煙草臭い淀んだ空気を追い出してくれた。空には薄い雲がかかっていたけれど、ところどころ青空ものぞいていた。
今日は恭子の島へ行く日だ。
僕はそう思い直すと、もういちど隣のベランダや遠くの町並みを、

近くから遠くまで見渡した。
梅雨は何日か前に明けていて、どうやら天気の心配はなさそうだった。
もうどこかで蝉の鳴き声が聞こえてきた。
夕べ土の中から這い出して羽化したんだろうか。僕は、蝉の羽化後は一週間の寿命しかないという話を聞いたことがあったから、今から羽化したら八月まで生きられないのに、と思った。
まったく一週間というのは短い一生だと思ったけれど、でももしかしたら彼等にとってはほんの１０分でも永遠に続くようなとてつもなく長い時間に感じるのかもしれないと、まだぼうっとしている頭で思いながら、めいっぱい伸び上がってあくびをした。
アラームが鳴り始めた。

僕は顔を洗って、髪の毛をきちんとセットした。
あまり格好など今も昔も気にしないほうだし、めんどくさいから適当でいいかと思ったのだけれど、もしかしたら恭子の実家へ行くかもしれないと思ったので、あの日はちゃんとしていこうと思ったのだと思う。
その割に服はいつもと変わらないＴシャツにいつも着ているコットンのシャツを羽織った程度だった。

ザックに着替えやなんやらを適当に詰め込み、台所へ降りると、僕がめずらしく早起きしてきたので、母がどこにいくのかと聞いてきた。
「学校の合宿や。何日か泊まるかもしれへんわ。」
僕はとっさにそう答えると、出勤前の父はコーヒーカップを口に運びながら、僕のいいかげんな嘘に気付いたのか、
「おまえももう3年やろ。遊び回ってるみたいやけど、ちゃんと勉強してるか？おまえが勉強してるとこ見たことないぞ。」と言った。

その時は僕のラフな服を見て、まさか小豆島まで行くとは誰も思わなかっただろう。せいぜい加太あたりに海水浴がてらナンパでもしにいくのだと思われただろうか。
「だいじょうぶ、勉強は順調や」僕はそう答えると、さっさとザックを肩にかけ、玄関へ向かった。

近鉄から大阪環状線に乗り換えると、緑色の天守閣や、京阪百貨店のウィンドウやサラ金の看板や、毎日毎日うんざりするほど代わり映えのしない街の光景がひろがった。

大学生にとっては夏休みでも、社会人にとっては単なる平日だった。電車はスーツ姿のサラリーマンや、部活や補習などで登校する高校生などで混みあっていた。
列車の中は朝からがんがんクーラーが効いていたが、それもなんとなく、夏休みらしくていいと思った。
その日僕は、いちいち地図を用意していなかった。本屋で見て、だいたい場所を覚えてきただけだった。
まあ、とにかく西に行ったらいいだろう。バイト代もかき集めてきたし、なんとかなるだろうと思った。
電車が、ひと駅過ぎるだびに、なんとなく不安にもなったが、それよりもわくわくしていただろう。

大阪駅へ着くと僕は、いったんホームを出て、切符売り場で券売機の上に取り付けられた、料金が記入された大きな路線図を見ていた。あいかわらず人が多くて、地下街に通じる階段は絶えず通勤する大勢の人々を吸い込み、そして大勢の人ごみを吐き出していた。
僕は路線図を西の端までさがしてみたが、「日生」という駅名はなかった。
しかたなく近くにいた駅員に、「載ってないんやけど」というと、

「どのあたりまでお出かけですか？」と聞くので、指で路線図を西へ延長してみせて、ちょっと大袈裟に、隣のグランビアホテルの入り口のあたりを指さして、「たぶんあのへんまで」と言った。
「あちらでお求めください」と駅員は丁寧に言った。
僕は長距離切符の発券窓口へ行くと、若い駅員に「ひなせ」と言った。「それどこです？」とか言われはしないかと心配したけれど、駅員はかしこまりました、
という表情でさっさと切符を出してきた。
僕はホームへ上がると、電車を待つことにした。僕はぼんやりしながら、さっき買った切符を見たり、マルビルの電光サインを眺めたりしていた。
上りのホームに、神戸方面から出勤する人々を乗せた空色の満員電車が滑り込んできた。ドアが開くと、桜橋口へ降りる階段に大勢の人々が流れ込んで行くのが見えた。僕が立っているホームにも混雑というほどではないが、電車を待つ大勢の人々が列を作っていた。
しばらくするとホームに、ベージュと茶色に塗り分けられた新快速電車が滑り込んできた。

とりあえずこれで姫路まで行けばいいだろう。姫路まで行けば、きっと次は別の電車が待ってるだろうから、それに乗り換えればいい。所詮海と山しかない田舎なんだし電車も東西に走ってるだけだから簡単だと思った。

京都方面から来た乗客が大方おりると、ホームで待っていた人々が列車に駆け足で乗り込み、空席の争奪戦が始まった。
それがひととおり収まると、しばらくして列車は静かに動き始めた。
僕は椅子取りゲームには興味はなかったので、乗り込んだ当初からドアの硝子に寄りかかって、流れ始めた外の景色を見ていた。
阪神高速を走るトラックの屋根だけが防音壁に見え隠れしながら、走り去って行くのが見えた。

やがて長い鉄橋にさしかかると、淀川が深い緑色の水の流れを見せた。

河原には親子らしい数人がバレーボールをしていて、その上を伊丹空港を飛び立った旅客機が、雲がきれて青く晴れ始めた空に浮かんでいた。

少しのあいだ、このうんざりするほど代わり映えのしない大阪の街ともお別れだなぁと思った。

列車が神戸を過ぎ、しばらくすると、それまでの街の景色が一転した。

海が視界に広がり、朝の陽光を受けて、穏やかな波がきらきらと細かな光を放っているのが見えた。

何隻かの大型船が沖に浮かんでいるのが見えた。海を見るのは何ヶ月ぶりだろうと思った。

列車はさらにスピードを上げながら西へと向かった。その後、僕は途中で列車を乗り継ぎ、街と海と山の退屈な景色を繰り返し見ながら西へと向かった。

通り過ぎる海沿いの町並みは、どことなくひなびた風情を漂わせていた。

太陽がまぶしかった。

僕は揺れる列車の窓から、きらきらと光る波を眺めながら恭子の事を考えていた。

彼女の故郷へ行くという喜びと僅かな緊張が僕を複雑な気分にさせていた。

彼女はもしかしたら、僕を両親に紹介しておきたいと思って僕を島へ呼んだのかもしれない。もしそうなら将来僕と一緒になりたいという意味なのだろうか。

それなら僕も嬉しいとは思ったが、直接彼女から聞いたわけでもな

く、就職も苦戦しそうな自分にそんなうまい話もないと思った。
単に夏休みの間、何もない島に帰郷するわけだから、僕に会いたいと思っただけなのだろう。
列車はしばらく平地を走り、町を通り抜け、やがて窓の向こうに青い海がひろがった。
いくつかの疑問はあったけれど、まあ、行ってみれば解ることだと思った。

途中なんどか、駅員に聞いたりしたが、なんとか無事に日生に着いた。
駅を出ると、潮の香りと油の匂いが風に乗って流れてきた。
日生の町には「鮮魚」や「市場」という字の、錆のまわった看板が所々にあった。
今思えば、何も知らなかったものだと思う。それを見て、ここって漁港だったんだと始めて知った。

恭子が言ったとおり、駅を出るとすぐにフェリー乗り場があった。
僕は小豆島の大部港ゆきフェリーの乗船券を買った。
それから恭子に電話をかけることにした。
待合室にぽつんとおいてある公衆電話は、がちゃがちゃとノイズがうるさかったが、呼び出し音が2度鳴って彼女が出た。
僕は彼女に、これからフェリーに乗るからと言った。
それから、「もうすぐ会えるなぁ」と言った。
彼女は嬉しそうに声を弾ませると「うん」と答え、少し間をおいて、恥ずかしそうにトーンを落とした声でもういちど、「うん」と答えた。低い電子ノイズの中で彼女の声だけが薄いガラスの風鈴の音のように涼しくやさしく聞こえた。
出航まで時間があったので、僕はフェリーが接岸する突堤の赤く錆

びた鉄の壁にもたれて海を見ていた。

瀬戸の海は穏やかで、まるで湖のように見えた。時々小さな波が、海草や黒い貝がいっぱいくっついた堤防にぶつかって、ちゃぷちゃぷと小さな音をたてていた。

魚の脂のような苦みのある匂いが潮風にのって流れてきた。僅かな細波に合わせてオレンジ色の浮きに結ばれたロープが小さく上下しているのが見えた。

夏の午前の日差しが強さを増してきていた。僕はコットンシャツを脱いでザックに詰め込むと、ヘインズの袖を肩までまくり上げた。

太陽が肌を焼いているのがわかった。

五

２０分ほどして僕は、ところどころ錆が垂れるように浮いているフェリーボートに乗り込んだ。船なんて今まであまり乗ったことが無かったので、船内のどこへ行けばいいのかよくわからなかったが、車両甲板の階段から2階へ上がりデッキへ出た。手すりに腕を置くと、潮が乗っていてべたべたしていた。

船が動き出すと、潮風が穏やかに吹いてきた。

瀬戸の海は青いとも言えるし、緑とも言える深い色合いを見せていた。水面は照りつけはじめた太陽に絶えずきらめいて揺れていた。そういえば幼い頃、父に連れられて、なんどか能登の海を見にいったことがあった。日本海の海は波が荒く、真っ青だったのを覚えている。それに比べ瀬戸の海はなんて静かでやさしい色なんだろうと思った。瀬戸内は優しい恭子の海だと思うと、納得出来る気がした。

日生港を少しはずれた海岸線には、ところどころに漁港や民家が軒を連らねていた。もう細い糸のようにしか見えない海岸沿いの国道

を芥子粒のような軽トラックが走っているのが見えた。

しばらくすると、どこから来たのか、静かな海上に漁船が、低いエンジン音と白い波しぶきをたてて現れた。漁船はフェリーに寄り添うように並んで走っていたが、やがて進路を変え、走り去っていった。

幾つかの島が遠くに近くに見えた。大海原と僅かな陸地が作り出す景色は美しく、そして、喧騒もなにもないシンプルな光景ではあったのだけれど、自然の壮大さに溢れていた。

太陽光線はまるで雨のように降り注いで反射し、光線が体を通り抜けていった。そのたびに僕の体は熱くなったが、ときどき吹く潮風は熱をぬぐって涼しくさせてくれた。

僕は、飲んでいたコーラの缶を床に置き、デッキに設置されたプラスティックのベンチに寝転ぶと、空気をいっぱい吸い込んで空を見ていた。

ボッボッボッとフェリーの低いエンジン音と波を切るざあっという音だけが聞こえていた。

空は真っ青で天球はいつもより高く見えた。遥か遠くを長い軌跡を引いてジェット機が飛んでいた。僕はザック枕にしてそれを見つめていた。

恭子は今頃、家を出て大部港へ向かっている頃だろうか。

僕のために案内するコースを考えたりしているのかもしれない。そしてかわいい頬や唇に薄い化粧をしてるだろうか。

そういえば、僕と付き合い始めてから彼女は化粧をするようになった。僕は大概鈍感な方なのでしばらく気が付かなかったのだが、ある日、あまりに彼女の肌がかわいく奇麗に見えたので、頬に触れようとしたことがあった。

そうすると彼女は僕の指を避け、

「さわったらあかん。化粧落ちるもん。」と言った。

僕は、”おまえ化粧してるん？”と聞きそうになったのだが、絵里

子から鈍感なのはだめだと言われていたので、「そっか、そやな、ごめん。」と言った。

すると彼女は、僕の指を取ると化粧が落ちないように、そっと頬に当ててくれた。彼女の頬は柔らかく、さながら菜の花畑を飛び交う蝶の羽のようだった。暖かくて、繊細で、そして美しかった。今想うとせつない思い出だ。

もうすぐ恭子に会える、そう思うと嬉しくて、海上ルートはまるで天国へ向かう道のように見えただろう。

僕は最初どれが小豆島なのか解らなかったが、
やがて前方に大きな海岸線が見えてきた。
島はほとんどが木々の緑に覆われているように見えたが、よく見ると所々ちいさな家が立ち並んでいるのが見えた。
フェリーはスピードを落とすと、慎重に船体を岸へ近づけていった。
島の港街はいくらかひらけてるとはいえ人通りは少なく、港の敷地を、何台かのトラックと、数人の従業員らしい男達が動き回っているのが見えるだけだった。

フェリーのキャビンから15人ほどの乗客が階下へ降りようと列をつくっていた。
ポロシャツ姿の男性が率いる家族は、ときおり顔を寄せ合うようにして観光地図をのぞき込んでいて、どうやら島へは海水浴に行くらしかった。
僕は列には加わらず、階段の上のデッキに取り付けられた手すりにもたれかかって少しずつ近づいていく岸辺に、恭子の姿を探した。
しかし結局、船の上から恭子をみつけることは出来なかった。

船が接岸すると、車両甲板から数台の乗用車とトラック、それから先ほどの乗客が下船を始めた。

僕もザックを背負いタラップへ向かった。
そう、なぜか不思議と緊張していた。
恭子とは学校ではいつも一緒にいた。昼食の時も、帰り道も、買い物に行く時も、日々のなにげないシーンにいつも一緒にいるふたりだった。なのにどうしてこんなに緊張するんだろうと思った。今、こうやって思い出しても、あの日の嬉しさ
と緊張感まで自分の中に再現できる。
僕は会ったらまずなんて言おうと考えていた。会いたかったって言おうか、なによりも先に好きだって言おうか。上手く言えるだろうかって。

タラップを渡り、美しい自然に囲まれた島の地に降り立った。
目を覆うような強烈な太陽の光だった。
陸は海上よりもかなり気温が高く、熱気がアスファルトの地面から沸き上がっていた。

僕は手首を目の上にあてると、目を細めて港内を見渡そうとした。
「仁史くん。」
声は僕の右手のほうから聞こえた。
僕が声がした方向へ振り向くと、恭子が微笑みながら立っていた。
洗い晒しのジーンズに、ピンクのハイビスカスの花が描かれた白いTシャツ姿の彼女は、恥ずかしそうにうつむきながら、両手の細い指を前で組むような愛らしいしぐさをした。

僕は嬉しさで、なによりも先に駆け出して、思い切り抱きしめてしまいたいと思った。
それでも、ゆっくりと近づいていくと、彼女の、僕を待つあいだ絶えず陽に焼かれていただろう白い肌がだんだん眩しく輝いてゆくように思えた。

「ちゃんと来たでぇ。」

僕は笑いながら言った。結局はそれしか言えなかったのだ。あの日の彼女の雰囲気は特別だった。なんといえば良いのだろう。眩しく光る、いや、輝いていると言った方がいいだろう。

彼女はいつものように、「なにしにきたん？」とか冗談を言うのかと思ったが、僕の顔をちらっと見るとまたうつむくと細い声で、

「会いたかった・・・。」と言って、僕の胸に顔をうずめるようなしぐさをした。

僕は思い切って両手で彼女の柔らかな体を強く抱きしめた。

彼女のシャツの、木綿のやさしい香りがするようだった。

六

港から僕らは、彼女が友達から借りてきたという軽自動車に乗り込んだ。

「おまえ運転できるんか？」と僕が聞くと彼女は、

「ここやったらね。大阪やったらこわいもん。」と答えた。

僕は彼女の言葉のイントネーションが少し変わったのに気がついた。ターンシグナルのレバーを器用に操作するしぐさにも、どことなく彼女が少し大人っぽくなったような気がした。

僕と恭子は海沿いの国道を走って、彼女の実家がある街へ行くことにした。

僕は助手席で彼女に、ここまで来るいきさつを話して聞かせた。

大阪駅で切符の買い方が解らなかったという話をすると、彼女は仁史君らしいと言って笑った。

車は夏の強烈な日差しを受けながら、逃げ水を追いかけて走った。

瀬戸内の海は青く美しい広がりを見せていた。

空気は遠くの島々まで見渡せるほど澄みわたり、太陽の光は、海水

をプリズムのように屈折しながら通り抜けて、浅い海底を遠くまで照らし出していた。寄せては返す波は細かな光を反射させ、ときおりそのかけらがサイドガラスから車内に入ってきた。
僕は恭子の横顔を見ていた。
光は白く細い指先や、きれいに揃えた髪の一本一本の中にまで入り込んで、まるで秋の野原のように栗色と金色に輝かせ、彼女の美しさを際立たせていた。

しばらく走ると、車はカーブの多い緩やかな上りに差し掛かり、上りきった地点からはひと回り大きな弧を描きながら下っていった。右手は海、左手には緑が生い茂った山が迫っていて、どこであっても、いい風景画が描けそうなくらい、自然が作り出す雄大さと美しい光景で溢れていた。
僕等の前後に他の車の姿はなく、彼女は上手に車を操作していた。それでも、カーブが多くなると怖いのか、僕が話をしても、「うんうん」と頷くのが精いっぱいのようだった。僕は可笑しくなって、
「運転、上手やん。」と言ってやった。
彼女は僕の言葉を考える余裕がないようで、「うん」と答えた。僕は大笑いしながら、
「だいじょうぶ。ゆっくりでいいねんで。」と言うと、彼女はまた
「うん」と答えた。

国道が平坦になると、両側に古い商店や民家が軒を連ねるようになった。町のようだったが、人通りは少なく、何人かの農作業着の老婆が、籠を背負って国道沿いを歩いている程度だった。
町を少し過ぎたところに国道と十字に交差する細い道があった。交差点の角には雑貨屋らしい老朽化した木造の建物があり、その影になって国道から見ると交差する道があるようには見えなかった。
彼女はシグナルレバーを操作し、スピードを落とすと、車を左折させた。

車がやっと2台すれ違えるほどの狭い道路の脇には、小さな畑が幾つかあって野菜が植えられてあるようだった。畑の側には、ひまわりが夏の日差しをいっぱいに浴びて、太陽に負けないくらいの黄色い花をたくさん咲かせていた。
恭子はそこから少し走った民家の前で車を止めた。
「ここがわたしのうち。」
彼女はそう言うと玄関の方を見た。
あの辺りだとどこにでもありそうな2階建ての木造建築だったが、人の気配がなく、今思うと、どことなくがらんとしていて、生活感が感じられない家だったように思う。
玄関の前にある小さな庭には早くも、白やピンク色のコスモスの花がたくさん咲いていた。
二階のサイドの窓には黄色のカーテンがかかってあり小綺麗にしてある部屋があるようだった。僕は、そこが恭子の部屋なのか、と聞こうしたが、彼女は、「でも、今日はだれもおれへんから、他に行こう」と言い、外へは降りず、また車を走らせ始めた。
彼女は少し走ると、舗装されていない狭い駐車場で細い腕を上手に交差させてハンドルを切り、車を転回させた。タイヤが土を蹴る音とともに砂ぼこりが舞い上がった。
僕らは再び海岸沿いの道路へ出た。

僕は恭子に、どうしてここへ呼んだのか聞こうかと思ったが、ここへ来たとき、彼女は港で「会いたかった」と言った。僕も彼女に会いたくてここに来た。それだけのことだと思った。結局そのことについて何も聞かなかった。
「ええとこやんか、自然がいっぱいやなあ」と言うと彼女は、
「大阪みたいに遊ぶとこないでぇ。」と答えた。
しばらく走ると、国道はまた海岸線の近くを平行するようになり、白い砂浜が広がった。
僕らは車を止め、誰もいない浜辺を歩いた。

神戸や和歌山あたりだったら海水浴客でごったがえしそうな奇麗な海岸だったが、人の姿はなくただ、長閑な浜辺が遠くまで続いていた。ふたりが歩いたあとの砂には僕等の足跡が出来ただろう。
ようやく梅雨が明けた瀬戸内の空は真っ青で、日差しが欠けることはなかった。
僕らはしばらく手をつないで波打ち際を歩いていたけれど、なにかの拍子でふざけ始めて、波に足を漬けてしまい、とうとうジーンズのまま水の中へ入ってしまった。
「もうこのまま泳ぐでぇ。」
そういうと僕は先に水の中へ飛び込んだ。
波の中へ潜ると、今まで絶間なく聞こえていた波の音が嘘のように消えて、ごぼごぼと僕が吐き出す泡の音と、海底を流れる砂の音がさらさらと聞こえるだけだった。光が水底の砂を波に合わせてゆらゆらと照らしているのが見えた。
太陽と海と、そう、やっと待ちに待った夏がやってきたと思った。
恭子は最初、水に入るのをためらっていたが、あんまり僕が気持ち良さそうだったのか、ばしゃばしゃと波をかきわけて僕の側まで来た。
彼女は波に顔も髪もつけて僕の肩にしがみついた。
僕は波に浸かりながら、はしゃぐ恭子の肩を掴み自分の胸に引き寄せた。
彼女は笑いながら僕の胸を二三度叩いたが、腕をまわして抱きしめるとおとなしくなった。
水の中で僕の胸や指先に彼女のしなやかな背中のラインと、豊かな胸の感触が伝わった。
波は遠くからだと穏やかに見えたが、重い水の固まりがふたりを沖へ誘おうとしたり、波打ち際へ押し戻そうとしたりした。
僕等は波に翻弄されながら、ふたりだけの時間を過ごしていた。

彼女は寄せては返す波の中で、何も言わず、ただ僕に身を任せていた。
ちいさな魚の群れが僕等のまわりを行ったり来たりしていた。

それから彼女は、軽自動車で島のワインディングを登り、山の頂上に僕を案内した。展望台まで登るといきなり視界が開けた。
島の海岸線の向こうには真っ青な瀬戸内海が広がり、何隻かの漁船やフェリーボートが行き来しているのが見えた。
手前にはひなびた町並みが見渡せ、どこか懐かしい雰囲気を漂わせていた。
どこに行っても、照り付ける太陽と木々の緑と海の青が、盛夏の強烈なコントラストとなって溢れていた。
いたるところで蝉の鳴き声がしていた。

僕等の周りを、蜂や蝶が飛び回っていて時々僕にぶつかっては飛び去っていった。虫たちにとっては短い夏の日なのだ。今思うと、あの日精いっぱい咲いていた夏の花も、あんなに活気のあった虫たちも、なにひとつとして今はもう生きてはいないのだ。そして、僕や恭子も、もう戻らない短い若い日を生きていた。生きとし生けるものはいつかは老いて死んでいく。でもあの時の僕はそんなことは考えなかっただろう。
虫たちは死んでも、僕と恭子はふたりで来年の夏も、再来年の夏も、ずっと永遠に歩いていける、そんな気がしていた。

「あそこが私のいってた小学校。」

彼女はそう言うと、緑の木々に見え隠れする広い運動場のある敷地を見下ろし指差した。
木造の校舎と、運動場には鉄棒や、ジャングルジムがあるのが見えた。

もちろん僕には、始めてみる学校ではあったが、なぜかすごく懐かしい場所に思えた。
幼い頃から恭子とここで一緒に育って、あのジャングルジムに登ったり、追いかけっこをしたり、一緒に手をつないであの畑のわき道を歩いてきた、そんな記憶が存在するような錯覚を覚えた。
「くわがたとかいてるかなぁ」
「うん、いるん。ちいさい時よくとったん。」
「恭子が産まれたとこ、ええところやなあ。俺この島好きやで。」
僕は彼女の横顔と、青く視界一杯に広がる大海原を交互に見ながらそう言った。
彼女は、「うん、・・・私もこの島が好き」と言った。
そう、あの島は恭子が産まれてから、大阪に来るまでの間を過ごしてきたところなのだ。
恭子はあそこで産まれ、幼い時代を過ごし、学生時代を過ごしたのだ。
楽しい思い出もたくさんあっただろう。思春期の頃には恋もしたのだろう。
あの島の豊かな自然と暖かい暮らしが、彼女を育んだのだ。あの優しいイントネーションは、あの島で暮らしてきた者の素朴さと優しさそのものだったのだろう。
幼い頃はここへ来て花や虫たちと戯れたり走り回ったりしていたのだろう。

僕は今まで知らなかった彼女の、もう戻らない過ぎ去った時間に、ほんの少し触れたような気がした。しかしそれは僕の想像に過ぎない。それ以上彼女は多くを語ろうとはしなかった。
彼女があそこで以前にどんな生活を送って来たのかも、今となっては解らない。
もっといろいろ聞けばよかったのかもしれない。しかし、その時僕は、彼女の優しさと穏やかさの中に、なにかどうしても追求できな

い排他的なものがあるような気がした。
僕が着ていた服も、僕が話す大阪弁も、あの島では大阪から訪れた観光客に他ならなかっただろう。しかしあの日の彼女は、暑かった夏の島の光景に溶け込んでいた。
栗色の髪、ピンク色のTシャツ、洗い晒しのジーンズ、眩しい太陽、海の香り、あの島が彼女そのものだったのだろう。
そう、まるで島に力強く咲く、ひまわりの花のようだった。

誰が植えたわけでもなく、自然の中で過ぎ行く季節を精いっぱい生きようとしている存在。
僕もあの島で産まれればよかったのにと思った。しかし事実は違うのだ。僕はそれが残念に思えた。いや、違うからこそ、あの島と彼女があんなに眩しかったのだろう。
１０年経って僕の記憶はいいかげんになっているのかもしれない。
彼女を想うとき、僕は自分の中で彼女の存在を美しく理想的にしたいという心理が働いているのかもしれない。
それでも僕の碌なものがない記憶の中で、彼女の記憶はひときわ明るくきらめく星のように今も存在している。
きっといつまでも消えることのない思い出として残っていくだろう。
彼女はあの日のことを今も覚えていてくれるだろうか。

まあ、確かに１０年が経って、僕と違って彼女にはもっと楽しい思い出もできただろう。
人間なんて、なんでもそんなに覚えていられるものでもない。いちばん楽しい思い出ができたら、古い思い出なんて塗り替えられていくものだろう。
でも、葉書をくれたのは、彼女も僕のことを覚えていてくれるからなのだ。
そしてあの日、僕も彼女にとって、あの盛夏の太陽のように眩しい存在だったのだろう。

僕は彼女の肩を引き寄せると、指を彼女の、波に洗われ潮の香のする髪に通して優しくといてやった。
彼女は目を閉じて気持ちよさそうに僕の肩に頬を乗せていた。それから僕は彼女の顔を少し持ち上げ、優しく唇を重ねた。ただ彼女と一緒にいたいと思った。
大阪駅の噴水前で僕を待っていてくれた彼女、福島駅のホームで手を振ってくれた彼女、全てが僕には輝く存在だったが、そんな彼女の思い出の中で、あの日の恭子はとりわけ美しかっただろう。
海から吹くそよ風は、時々木々をざわざわと鳴らせていた。

夕方、もうほとんど陽は落ちて、暗い木々の上空は、水彩絵の具をなんども塗ったような真っ赤な夕焼けがかかっていた。僕と彼女の白いTシャツもオレンジ色に染まった。
海上は、まだわずかに残る青空と、夕陽に赤くそまった薄い雲が紫色の微妙な色調を見せていた。
僕は彼女と一緒にいたいと思っていたが、それでも、
「おまえ、もう家に帰り」と言った。
彼女はふっと淋しそうな表情をみせると、
「友達のとこに泊まる言ってるから大丈夫。」と答えた。
僕はなんと言っていいか困って彼女を見ていた。
彼女は僕の腕にすがりつくと小さな声で、
「一緒にいたいん。」と言った。

国道沿いに白い看板に黒のペンキの行書で「国民宿舎」と書かれた建物があった。僕等は他に探すのもめんどうなので、そこに泊まる事にした。
宿といっても、古い木造を改造したような作りで、玄関は狭く、もらい物らしいカレンダーや、木彫りの置物などが無造作に飾られていて、まさしく普通の民家を改造しましたといった感じだった。

従業員というか、おそらくここの一階の住人であろうおばさんは、笑顔で僕等を二階へ案内した。板張りの床や階段は歩くとミシミシとなった。
部屋は、一階よりはるかにきれいな和室だった。
新しい畳の匂いと潮の香りが心地よかった。客間だけ見れば、そこそこの旅館の部屋のようだった。

ガラスの引き戸は国道と反対側に面していて、ベランダからは白い砂浜と見渡す限りの海が広がっていた。
波打ち際から海の香と波の音が、部屋の中まで入ってきて、ずいぶん落ち着く感じがした。
「なんか、いい雰囲気やな。」
僕がそういうと、彼女も嬉しそうに頷いた。

食事ができましたと言うので下の広間へ降りてみると、若い夫婦とちいさな子供ふたりの四人家族がもう食事をしていた。どうやらその夜の宿泊客は僕等と彼等だけのようだった。
食事は、瀬戸の小魚を使った質素なものだったが、その分たくさん食べた。彼女は僕の豪快な食べっぷりを見て笑った。

日が沈むと涼しくなって、浜風が気持ちよく吹くようになった。
宿舎の建物の前の砂浜へは一階の通路からすぐに出ることができるようになっていた。僕らは夜の砂浜に出掛けることにした。
その日の夜の瀬戸内海は、昼間の暑さが嘘のように涼しく、夜風は澄みわたり、肌寒くすら感じられた。
「花火、買うてきたらよかったかなあ。」
「うん、でもいいん。」
僕は彼女の手を取るとざくざくと砂浜を歩いて宿から少し離れ、砂の上に腰掛けた。それから恭子の肩を抱いて引き寄せ、空を見上げた。

「すごいで、恭子、見てみ。すごい星空や！。」
その日の夜空は驚くほどの星空だった。まるでダイヤモンドの粒をちりばめたようで、その光で空が明るく見えた。都会ではとても見られない光景だった。
明るい星、小さな星、ほの赤くみえる星、青白く光る星。とても数え切れない数の星が瀬戸内海の上空に輝き、瞬いていた。
「すごいなあ、空がまあるく見えるで。」
彼女は「うん」と答えると、びっくりしている僕の顔を見て笑った。
「きれいやなあ。」僕が感心していると、彼女も空を見上げた。彼女はうなずくと、嬉しそうに僕の肩に頬を寄せた。

僕は彼女の肩を抱きしめながら
「恭子、大好きや。」と言った。
「うん、好き。」と彼女も答えた。
「あの星すごい明るいなあ」
僕がそういうと彼女も同じ星をみて頷いた。
「あれは何星？」
彼女は僕に聞いたが、僕に解るはずもなかった。それでも小学校のキャンプの時に教えてもらった話を思い出して、
「たぶん一等星とかかなあ。」と答えた。
それから、「あの星はずっとあるねんで、僕らが産まれる前から、死んだあとも、あそこにあるねんで」と言った。
彼女は僕の顔を見上げると小さな声で、
「永遠にあるん？」と聞いた。
「うーん、ようわかれへんけど何億年くらいあるんとちゃうかなあ、ほとんど永遠みたいなもんやろなあ。」
僕がそう答えると彼女は、しばらく星をうっとりと見ていたが、僕を抱きしめるように身を寄せると、
「あのね、ここから永遠なものってあるん？」と聞いた。
僕はその時、恭子がどうしてそんなことを聞くのかよく解からなか

ったけれど、
「あほやなあ、永遠なものは俺や恭子が産まれる前から永遠やねんで。ここから永遠なもんなんかないで。」と答えた。
彼女は「うん」言い、納得したようだった。
「でも、俺の愛は永遠やで、何億年後、あの星が死んでも、恭子のこと愛してるから。」
僕がそう言うと、彼女は甘えるように頷き、また僕の胸に顔を埋めた。
「あの星に比べたら俺達の人生は短いなあ。たった１０年経ったら３０やで。おじさん、おばさんやでえ」
そう言うと恭子は、「うん」と答えて笑った。
「１０年は長いかなあ、短いかなあ、俺は１０年後は恭子と結婚して、子供もいるかなあ。」
僕がそう言うと彼女は、僕の顔を愛おしそうに見つめ、
「そのときまた一緒にあの星見れる？」と言った。
僕は、「そのときがきたらまた一緒にあの星を見よう」と答えた。
天球には無数の星が輝いて、今にも砂浜に降ってきそうな気がした。

それから僕らは風呂に入り、浴衣に着替えた。
彼女の浴衣の胸元から見える肌はほんのりと赤く染まり、美しかった。蛍光灯を消し、優しく抱きしめると、まだ乾ききっていない髪に指を通し、口付けた。それから彼女の肩から浴衣をそっと外し畳の上に落とした。
窓から差し込む星明かりが彼女のきめ細かく美しい肌と、成長した女の肉体を浮かび上がらせた。
柔らかくしなやかな体を優しく寝かせると、洗いたてのシーツの香の上に、彼女の湯上がりの髪の香りと、大人の女の香りが僕の中で弾けた。
僕は自分の指を彼女の指にからませた。彼女の汗ばんだ小さな手のひらや細い指が、なんて柔らかくてかわいいんだろうと思った。そ

の夜、僕は恭子を抱いた。

／／／／／PART2へ続く

第2部

七

次の日、空は昨日よりも雲がまばらにかかっていたが、それでもいい天気だった。
僕らは朝食をすませるとまた軽自動車に乗り込んだ。
今日は僕が運転しようかと聞いたが、彼女は自分が運転すると言った。
きっと終始自分がいろいろ案内しようと考えていてくれたのだろう。
国道に出ると早くも強烈な日差しがアスファルトの上に日向と日陰を作り、気温は瞬く間に上昇をはじめた。
車は島の南にある湾に面した細い道路をぐるっと周り、岬の先端まで行った。
彼女はバッグからポケットカメラを取り出し、僕を撮ると言った。
僕がなにか変なポーズをすると、彼女は喜んでシャッターを切っていた。
それからちょうど近くを通りかかった地元の若い女性に頼んでふたりの写真を撮ってもらった。
そう、僕は彼女の右にいて、バックには青い瀬戸の海が写っていたはずだ。
僕はぎゅっと恭子の肩を抱き、彼女は恥ずかしそうに僕の肩に頭を乗せていた。
シャッターを頼まれた女性は、おおよそ通勤途中かなにかだったのだろうけど、朝っぱらからいちゃついている僕等に頼まれ、まいったことだろう。
あの写真を恭子は今も持っているのだろうか。
僕はいつかその写真を観るときが来るだろうか。

来ないだろうか。

僕も恭子の写真は何枚か持っているが、全部実家に置いてきている。まあ、いいと思う。写真などなくても、僕はあの日の思い出は鮮やかに思い出す事ができる。そう、こうやって腕を伸ばせば恭子がいて、僕は彼女の細く柔らかな肩を引き寄せる。

海と緑と蝉の鳴き声と。

写真は色褪せても、あの日の思い出はずっと永遠に色褪せないだろう。それから、僕等は途中、土産屋に寄って弁当とお茶を買い込んで、オリーブの木がたくさん植えられている公園へ行った。

昨日と同じように海は穏やかで、まるで水の上を歩いていけそうなほど平らに見えた。

海から吹く風は甘い潮風を高台まで運んできて、僕等の鼻先をかすめっていった。

夏草が生い茂る公園の周辺には、白い、小指の先ほどのちいさな花がたくさん咲いていて、夏の日差しを一杯に浴びて、飾らない美しさを放っていた。

公園には地元のまだ若い女性が、まだちいさい子供を遊ばせていた。子供はベンチに腰掛けた母親の周りを走り回ったり、時々しゃがんでは、地面に落ちているものを興味深そうに拾い集めたりしていた。女性は僕等に気が付くと頭を下げた。僕等も彼女に会釈をした。

僕等は木陰のベンチに腰掛けると、目の前に広がるパノラマを眺めながら、言葉を交わした。

蝉の鳴き声がうるさかったが、恭子の声だけはガラスの風鈴のように涼しく爽やかに聞こえた。

僕は、もっと彼女と、あの島のことが聞きたいと思っていた。

ただ、まだあまり深くは聞かなくてもいい思ったので、話の合間になにげなく聞いてみた。

「恭子が小さがった時も、よくここに来たん？」
「うん。友達とよく遊びに来たりしたん。」
「そっかあ。」

「もう友達あんまりおれへんけどね。」
「なんで？」
「みんな、島を出ていってしまったん。」
「そっか。」
「でも、楽しかった思い出はいつまでも消えへんから。ずっと。」
僕が生まれ育った生駒では、小さい頃の友達は、その当時はまだ、ほとんど幼い頃と同じ住所に暮らしていた。
僕は、恭子とは生まれ育った環境が違うことを実感させられたような気がした。
なにか聞けば聞くほど、ふたりの間が遠くなるような気がしたので、その時はそれ以上聞かないでおこうと思った。
僕は卒業したら恭子と結婚したいと思っていた。だから彼女が島で生きてきた思い出は大切にしてやりたいと思った。島は彼女の故郷であり、彼女が大切にしている場所なのだ。だからずっと大切にしてやりたいと思った。

僕は腕を恭子の肩にまわし、彼女の顔を覗き込むように見つめると、
「そうや、思い出大切やもんな。」と言った。
僕は彼女を見ていた。
今こうして二人でここへ来たことも、僕等の楽しかった思い出として彼女の中へ刻まれて行くのだろう。
そして、彼女が生まれ育った、海と緑に溢れた美しい島の光景、それから、かわいい彼女の指先や、髪の毛の一本一本までがきっと僕の中に永遠に消えない思い出として残るだろうと思った。

「あの蝉の命は短いんやて。僕等の一生も短いんやろなあ。でも恭

子と一緒やったら幸せやで。きっとふたり幸せになろうな。」
そう言うと彼女は、頬を赤くして僕にそっと寄り添うと、小さく頷いた。

しばらく公園の中を走り回っていた子供は、母親のもとへ戻ると、幸せそうにその腕に抱かれた。

それから僕等は、また海へ行ったり、醤油工場を見に行ったりした。
僕はザックに詰め切れないほど、彼女は軽自動車に積み込めないほど、ふたりでたくさんの思い出を作った。
しかし結局、再び彼女の家へ行くことはなかった。

暑い夏の太陽は、西の海原に向かって傾き始めていた。

夕方になって僕等はフェリー乗り場の近くにある喫茶店に入った。
このあたりにしてはめずらしい洒落た店だった。木製のテーブルがならんだ落ち着いた雰囲気の店だった。
僕はアイスコーヒー、彼女はいつもどおりアイスオーレを飲んでいた。ストローで氷をかき混ぜるしぐさは、大阪でもここでも同じだと思ったが、彼女のしぐさは、昨日よりいっそう美しく見える気がした。それが昨夜、彼女は僕に抱かれ、大人の女性としての輝きを増したのかもしれないと思うと、僕は満足だった。ただ、またしばらく彼女と別れなければならないのが辛かった。
島での2日間はあっと言う間に過ぎていった。帰りのフェリーの出港時間もだんだんと迫ってきていた。
「おまえいつ大阪に戻るん？」と僕が聞くと彼女は、
「うーん、家の用事がすんだら。」と答えた。
僕はテーブル越しに彼女の手を握った。
彼女は自分の手と僕の手が繋がれた一点を見つめていたが、突然目に涙を浮かべた。

涙は彼女の愛らしい頬をひと筋、ふた筋と流れた。いつもは落ち着いた彼女の涙を見たのはその時が始めてだった。やがてしゃくりあげるように泣きはじめた。
僕はただ彼女のかわいい手を握ってやっていた。
今思えば、その涙の意味を聞いておけば、全ての答えはそこで出ていたのかもしれない。いや、聞かなくてよかったのだろうか。
僕は右手で彼女の熱くなった頬に手を当ててやった。親指が彼女の涙に触れた。

僕は、「先に帰って、恭子が戻ってくるん待ってるわ。いつも大好きや、恭子のこと大好きやで。ずっと愛してる。」と言った。

八

フェリーが岸を離れ、静かな海上に白い航跡を引き始めると、恭子の姿はだんだん小さくなった。
僕は何度も手を振り、彼女も手を振った。やがて恭子の姿は芥子粒のように小さくなったが、それでもずっと僕を見送っていてくれた。
僕も見えなくなるまでずっとデッキで恭子の姿を見ていた。

大阪への帰り道、列車の窓から見える夕日は海に反射して奇麗だった。
僕は窓を飛び去っていく景色を眺めながら、ずっと恭子のことを考えていた。
島での2日間は本当に楽しかった。そして今まで僕がしらなかったこと、そして彼女が生まれ育った場所まで見ることが出来た。ただ、彼女の両親や、兄弟や、生い立ちについては、新しい情報はなにも得られなかった。いや、なにも聞かなかったのだ。
その時僕は、いつか僕が知るべきときが来れば、きっと彼女のほうから話してくるだろう、詮索をするのはよそうと思った。

うとうとして気が付いたら、列車は西宮あたりまで帰ってきていた。
嫌というほど走ったような気がした。
列車が大阪まで着くと、なぜか夜の大阪の景色が懐かしく見えた。
高層ビルの明かりや大勢の人々でごったがえすホームですら、不思議と落ち着くような気がした。
僕は大阪駅で恭子と待ち合わせをした日のことを思い出していた。
そう、ヘッドライトの川の中で、彼女を抱いた。
「好きよ・・」
僕がいちばん聞きたかった言葉だった。
そう、彼女は僕を大切に思ってくれて、好きでいてくれている。そして僕も彼女をかけがえのない人だと思っている。もちろんそんなことは、ふたりが付き合い始めたときからわかっていることではあるけれど、島へ行って、それを確かめ合えただけでもよかったやん、と思った。
ひとつだけ気になっていたのは彼女が見せた涙だった。
僕を想うが故に流してくれた涙なのは確かだと思ったが、なにか気になるものがずっと残っていた。

なんとか実家まで帰りつくと日付が変わっていた。
何日かして僕は恭子に電話しようかと思ったが、用事があると言っていたし、実家まで電話するのはやめたほうがいいと思ったので、向こうからかかってくるのを待つことにした。

そうこうするうちに、またバイトが始まって忙しくなった。
結局、それ以来恭子から電話がかかることはなかった。それどころか、後期の授業が始まっても恭子は大阪へは帰ってこなかった。
さすがに心配になって、僕は恭子の実家へ電話してみたのだが、なぜか「現在使われておりません」というメッセージが流れるだけで電話はまったく繋がらなかった。

それから僕は、恭子が福島の部屋へ帰っているのではないかと思って尋ねてみると、部屋は空き家になっていた。
僕が立ちすくんでいると、ちょうど大家が不信そうに出てきたので、恭子のことを聞いてみた。
「藤村さんは7月に実家へ帰られて、ずっと空き家ですよ。」
僕はそれを聞いて愕然とした。恭子は島へ帰るとき、一切合切の荷物を島へ送って部屋を引き払っていたのだった。
大学でも恭子のことを聞いてみたが、彼女は7月で中退したと言われた。
不安が僕の心の中を行ったり来たりしていた。あの時彼女が見せた涙が、悪い予感へと繋がっていくような気がした。
僕は、大学の構内を探し回って絵里子をつかまえると、恭子のことを聞いてみた。
絵里子は、「うーん、わかれへん」と答えた。
僕は絵里子の前に立ちふさがると、
「なんでや、おまえ何か知ってるやろ。」と強い口調で問い詰めた。
絵里子は僕を両手で突き放すと、
「知らんってば!。仁史が知らんこと、なんでうちが知ってるん!」と言った。
僕は肩を落とすと、「そっか、ごめん。」と謝り、その場を立ち去ろうとした。
すると絵里子は、僕に近づいてきて、
「あんね、ほんまにわかれへんねん。ほんまやで。でも、前にうちと恭子ちゃんとふたりで会ったとき、実家に帰る、ゆうて泣いてたん。どうしたんか聞いてんけど、「大丈夫」言うてなんにも教えてくれへんかってん。」と言った。
それから僕と絵里子は相談して、電話をかけてみたり、彼女の消息

をつきとめようとしたが結局はなにも解からなかった。

それからしばらく、僕はずっと恭子のことを考えていた。
バイトも辞め、学校も度々休むようになった。ただ恭子が戻ってきてくれるのだけを待っていた。
しばらくして、絵里子から電話がかかってきた。
「もう、恭子ちゃんのことあきらめ。たぶん恭子ちゃんにもいろいろ事情あったんやわ。」
彼女にそう言われ、僕は止め処もなく涙が溢れ、もう何も言えなかった。
僕はなにもかもが自分の周りから消えてしまったような、どうしようもない喪失感の中で、ただ生きているだけだった。
もう、何を見ても笑うこともできず、時折押し寄せる悲しみの感情を押し返す力もなく、ただ、恭子が戻ってくれることだけを祈っていた。
電話が鳴って僕が出る。電話の向こうからは恭子の声が聞こえてくる。
あのやさしいイントネーションで、「ごめんね、遅くなってん。」
そう言ってくれたら僕はどんなに救われるだろう。そう思うとまた感情が溢れ、ただ布団にうつ伏せるしかなかった。
僕は長い迷路の中にいた。朝も夜も、どうしても抜けられない闇の迷路をさまよっていた。

僕はどうしてこんなところにいるのだろう。僕はどうしてこんなに苦しんでいるんだろう。
なにもできなかった。まるでテレビのチャンネルをどんなに回しても、何も見ることも聞くことできず、ただ、暗い画面を見つめているだけのようだった。
自分だけがどうしてこんなに苦しまなければならないのだろうと思っていた。僕は恭子に捨てられたのだろうか。

だんだんとそう思うようになってきていた。

島のフェリー乗り場で僕を見送り、いつまでも手を振ってくれていた、あの彼女のかわいらしい姿を、僕は１０年経った今でも思い出すことができる。

そう、結局それが、僕が恭子を見た最後だった。

ある夜、僕はひとりで京橋の居酒屋へ行き、酒を浴びるほど飲んで、恭子とよく行った大阪城公園へふらふらと傘もささずに歩いていった。

それから川のほとりの手すりに寄りかかり、いつまでも流れを眺めていた。

流れていく暗い水の中に時折、ニューオータニやビジネスビルの明かりが反射してきらきらと光っていた。

すぐ側の鉄橋をいつものように、大阪環状線のオレンジ色の電車が何度も通り過ぎていった。

僕は暗い川の流れの中に、恭子との思い出を手繰り寄せようとしていた。

僕は恭子と付き合い始めたときのことを思い出していた。

その年の春、大阪城公園の梅が奇麗に咲いていたころだった。恭子と僕はまだ友達だったが、僕はそれより半年も前から恭子のことが好きだった。いつも恭子のそばにいたし、僕が誰より彼女に近かっただろう。

ただ、好きだとも言い出すこともできず、ただいつも彼女を守るように一緒にいるだけだった。

ある日、同じ学部のひょろっとした男が、僕に封筒を渡すと恭子に渡してほしいといった。

見かけは頼りなさそうな男だったが、優しそうで、人の良さそうな男だった。

封筒の中の手紙は、おおよそラブレターのたぐいか、コンパの誘い

に決まっている。自分で渡せばいいだろうと言おうと思ったが、この男が恭子を誘ってるのは見かねるので、引き受けてしまった。僕はその手紙を捨ててやろうと思ったのだけど、卑怯なこともできないと思ったのでしぶしぶ恭子に渡した。

「どうせつまらない誘いやから、捨ててしまい、そんなんいらんやん。」

僕がそう言うと彼女は笑っていたが、手紙を持って帰った。

次の日、彼女は僕にかわいい水色の封筒を渡すと、その男に渡してくれと言った。封筒は糊付けしてなく、中を見ようと思えば見れたけれど、僕はそれもできず男に渡した。渡す時、「恭子から。俺は中を見たりしてないから」と言うとそいつは、「ありがとう」と言った。

それから恭子は、阪神百貨店へ行こうと言うので、僕がどうしてかと聞くと、バレンタインのチョコレートを買うのだと言った。

「おまえ、もう3月やでぇ。」というと彼女は、「いいねん。」と答えた。僕は胸を締め付けられるようにやるせなくなったが、

「まっ、恭子にも好きな人いるやろうしなあ。いつも俺がそばにいてたらあかんのかなあ」と言った。そういうと彼女は笑っただけだった。

百貨店の地下で彼女は銀紙に包まれたチョコレートがたくさん詰まった箱をプレゼント包装にしてもらい、メッセージカードも貰っていた。

それから僕らは百貨店のフロアを順番に見てまわった。彼女は女性服売り場を楽しそうに見ていた。

僕はマネキンに着せられた服を見ながら、きっと自分の気持ちを解かってもらいたかったのだろう。

「恭子はかわいいからなんでも似合うで。」と言った。

それから僕等は、最上階にある喫茶店に入った。彼女は筆箱からカラーペンを出すと、メッセージカードを書き始めた。そして僕に「

見んといて」と言った。
「ああ、まあゆっくり書き。」そういうと僕は、仕方なく壁にかけてあるシャガールを見ていた。
その時まで僕は、タイミング的に見て、あの手紙を書いてきた男のためにチョコレートを買ったのだと思い込んでいた。
彼女はカードを書き終え、チョコレートの箱に添えると、「はい」と言って僕に渡した。
僕は肩をすくめると、「また、おつかいに行かなあかんの？」と聞いた。
すると彼女は、顔を真っ赤にして、「ううん、仁史くんに。」と言った。
カードには「これからもずっと一緒にいてください」と書かれていた。
あの男からの手紙は案の定ラブレターだったらしいが、彼女は断りを書いて僕に渡させていたのだった。
そのときの僕の喜びはたいへんなものだった。
僕はテーブルごしに彼女のちいさな手を握ると、
「俺も恭子のことがずっと好きやってん。なかなか言えなくてごめん」と言った。
彼女は恥ずかしそうにうつむくと、繋がれた自分の手と僕の手をを見つめ、小さな声で「よかった」と言った。
その日は僕の人生の最良の日だと思った。

そして次の日、僕らは学校をさぼり、ふたりだけで手をつないで、春の日差しが眩しい大阪城公園を歩いていた。
まだ風は少し冷たかったが、紅白の梅の花がきれいに咲いてあちこちに春の香りが漂っていた。
芝生の緑も、土の香りも、襟元を吹き抜けてゆく風も、春の訪れに全てが鮮やかで目を覆うほどの明るさだったが、僕にはどんなものも、いつも隣にいてくれる恭子が、時折見せるやさしい笑顔の眩し

さにはかなわないと思った。
彼女はひとりの女性なのだ。そして彼女も僕も、人間にしかすぎないのだ。やがては年老いていく存在にしかすぎない。
しかしその春の日、彼女の若さは、健康美に満ちた肉体と優しい心を、完璧なまでのバランスで存在させて、溢れるほどの生命力と輝きを放っていた。
そう、それにあの時、僕も輝いていたのだろう。
彼女も僕を、あの早春の日の陽差しのように暖かく、眩しい存在と思ってくれていただろう。

帰り際、僕はホームのベンチで彼女の肩を抱いた。内回り電車が来ても彼女は乗ろうとせず、「もうすこし一緒にいたいん」と言った。
オレンジ色の電車は次々に止まっては、過ぎていった。

僕は酔った頭で彼女との思い出を回想しながらいつか、川縁にへたりこんでいた。
秋雨前線は今日も朝から雨を降らせていた。
空を見上げると雨が、鈍い銀色の矢のように地面や、僕の顔に落ちてくるのが見えた。
雨は暗い川の水面に落ちては無数の波紋をつくり、そのたびにビルの明かりや、電車の室内灯を反射させ、細かい光の粒になって輝き瞬いていた。
・・・恭子、おまえどこにいったん。もうふたり終わりなんか？・・・。
彼女の消息がわからなくなってまだほんの数ヶ月だったが、僕には１０年も経ったように感じられるほど辛い日々だった。
まだどこかで、恭子は必ず帰ってきてくれると思っていたのだろう。
ただそんな希望だけにすがって、毎日を過ごしていたように思う。
１１月も終わり頃になって、僕はひさびさに大学に行った。

両親からは、酒とたばこに溺れていると叱られ、学校に行かないのならやめてしまえとも言われた。
それでもなんとか立ち直ろうとはしていた。
大学で絵里子と会った。絵里子も恭子の実家に何度も電話したり、手紙を書いたりしてくれたようだったが、電話はかからず、手紙は全て戻ってきてしまうらしかった。

僕は絵里子に、「島へ行ってみようかなあ。」と言った。
彼女は、
「そんなんやめとき、そっとしといたげるんが優しさやで。」と優しく諭すように言った。
そう言われて僕は、またぼろぼろと泣いた。絵里子は困っているようだったが、
「恭子ちゃん、きっと幸せになれる道を見つけたんちゃうかなあ。仁史やって、恭子ちゃんが幸せになったらええやろ?。」と言った。
僕はもうなんとも言えず、ただ頷いただけだった。
大学に面した民家には小さな庭があって、白やピンクのコスモスが植えられていた。コスモスは、まだ咲いていたが、実が膨らんでたくさんの種を宿していた。

九

それから僕はなんとか大学を卒業し、今の会社へ入社した。
それから洋子と知り合った。洋子は明るい性格で、前向きな女性だった。
僕と洋子は最初、それほど惹かれあったというわけでもなかったのだが、それでもお互い興味のあったことや、話題が合ったのだろう、ほどなくして結婚し、娘が産まれた。
今僕は、洋子の気配りがきいて、一生懸命に生きようとする姿を見ているとなにか逞しさのようなものを感じる。

そう、娘が植えた、ベランダのプランタで精いっぱい咲くちいさなひまわりのように。
そんな彼女に僕は、安心感を感じている。そして家庭をもつことの幸せと喜びを感じているだろう。彼女も僕をそう思ってくれているだろう。娘が産まれてしばらくは何かと大変だったが、それでも僕等3人家族はま
娘が産まれてしばらくは何かと大変だったが、それでも僕等3人家族はまあまあ幸せなんだと思う。
恭子の記憶はだんだんと色褪せてゆき、島でのことも遠い思い出となっていた。
あれからもう10年が経ったのだ。

僕は隣に寝ている洋子を起こさないように、静かに布団を抜け出すとリビングへ行き、ソファーに腰掛けた。
それから恭子から届いた葉書と地図をならべてみた。
「御荘」というのは四国の愛媛の地名だ。愛媛のかなり南の方にある町だ。
いっそのこと御荘まで行ってみようか、彼女の手がかりがつかめるかもしれない。

僕は一瞬、安直にそう思った。

――今とても幸せです。私、あの日から永遠なものを見つけました。
――

そう、彼女は今幸せなのだ。
僕が行ったところで、あの日僕が島へ行った時のようにはいかないのだ。
僕に会いたいのならば、住所くらいは書いたはずだ。
今はそっとしておいてやるべきだろう。

僕がいなくても、彼女が今幸せであること、それだけは確実なのだ。
ただ、この葉書は僕に何かを伝えようとしていることも確かだ。
恭子の姓は変わっていない。彼女はまだ独身なんだろうか。いや、姓を変えていたら、僕はこの葉書の差出人があの恭子だと解からなかったかもしれない。
そう思って恭子は旧姓を使ったのだろうか。
僕は確実なことと不確実なことを自分の心の中へならべ、今はもう過ぎ去って遠くなってしまった日々に思いを馳せていた。
恭子はどうして僕から去っていったのだろう。
今となっては、それは遠い日に起こったことに対しての疑問なのだ。
今更それを引き出してどうなるものでもないだろう。
それでも僕は、彼女の葉書に書かれた文字を見ると胸が熱くなった。
今彼女は３０才になっている。僕と同じく幾分老けただろうか。それでも、あの白くて美しい指で、僕のためにこの文字をしたためてくれた。僕のことを忘れず、覚えてくれているのだ。彼女が僕から去っていったのは、僕を好きでなくなったからではないのだ。それもまた確実なことだろう。
きっとなにかどうしようもない事情があったのだ。
僕は、今はもう思い出でしかない出来事の、意味や答えを探そうとしていた。

絵里子が言ったように恭子は、四国の金持ちかなにかと見合いして、嫁いでいったのだろうか。いや、それなら彼女は僕にそう言ったはずだ。それとも言えなかったんだろうか。
島の喫茶店で彼女が見せたの涙の意味は、それを言い出せず、ただ涙を流すことしかできなかったということなんだろうか。
もっと考えられそうなことはないだろうか。
・・・例えば親の転勤かなにかで、この四国の辺境の地へ引越したとする。
たしか彼女は「家の用事」と言っていた。

その後、絵里子が言ったように見合いをして結婚したとして、今は子供もいるとする。そして、「今とても幸せです」という言葉につなげると納得ができた。

そうと仮定して、「あの日から永遠なもの」とはなんだろう。
そういえば確かに彼女は、あの満天の星空の下で、「ここから永遠なものってあるん？」と聞いた。
彼女が書いた「あの日から永遠なもの」の「あの日」とは、あの夜のことに違いないだろう。
あの日、あの夜、彼女といたのは僕だけだ。あの夜、僕は恭子を抱いた。それが彼女には生涯忘れ得ないような衝撃的な経験になったという意味だろうか。
いや、それを説明するのに「永遠なもの」というのは大袈裟すぎる。

あの夜、僕は彼女に「俺の愛は永遠や」と言った。
恭子は今も僕の愛を信じていてくれているのだろうか。

僕は自分の中で、考えられる説をまとめてみることにした。
１０年前、恭子の実家は「家の用事」で愛媛へ引越しすることになった。
恭子も一緒に行かなければならない事情があったのだろう。それで誰にも言わず、
福島の部屋を引き払い、大学を中退した。そして僕を島へ呼び、ふたりだけで最後の時を過ごそうとした。島の喫茶店で彼女は、僕に全てを話すつもりだったが、結局は何も言いだせなかった。
その後、彼女は結婚して、僕と同じようにもう子供もいるかもしれない。独身でいるのかもしれない。ただ、今は幸せでいるのだけは確かだ。
そして僕とのことを心の中で、楽しかった思い出として永遠に愛してくれている。

「あの日から永遠なもの」とは僕と過ごした、楽しかった日々の思い出のことなんだろう。
そう、あの日から僕は恭子の思い出になり、恭子は僕の思い出になった。

きっと、恭子も僕と別れてからはたくさん泣いて、そして苦しんでいたのだろう。
僕はひとりで長く暗い迷路を歩いていたのではなかったのだ。
彼女と一緒に、いつ果てるともなく長く感じた、あの辛い日々を共に歩いていたのだ。
ふたりで過ごした楽しかった時も、会えなくなって辛かった時も、もう取り返すことのできない大切な時間を、共に一緒に歩いていたのだ。

１０年も経って葉書をよこしたのはどうしてなのだろう。
たしか僕が島へ行ったあの日は、１０年前のちょうど今ごろだった。
彼女は覚えているのだろう。
あの暑かった夏の日、彼女の島で一緒に過ごした時を、鮮やかな思い出として今も覚えてくれているのだ。
そう、今僕が、ふたりで過ごした日々のことを思い出しているように、彼女もまた、あの楽しかった日々の思い出の中へ戻ろうとしている。
そして今も、あの日の続きをふたりで歩いているのだ。

僕らは満天の星空の中、ひときわ明るくきらめく星をみていた。

「１０年は長いかなあ、短いかなあ、俺は１０年後は恭子と結婚して、子供もいるかなあ。そのときがきたらまた一緒に星を見よう。」

そう、僕はあの夜、確かにそう言った。

「星や・・・恭子は星のことを言ってるんや・・・」

僕は慌ててソファーから飛び起きると、ベランダへ走り出た。
もちろん星を見たところでどうなるというものでもないことは解かっていたが、僕にはそれだけが、今は遠く離れてしまった恭子と自分を唯一、繋げてくれるもののように思えた。

「ここは１４階や。ここからでも見えるはずや」
僕はそう呟くと、ベランダの手すりに体を預け、空を見上げた。
名神高速の上空には排気ガスと低い雲がかかって、星はひとつも見えなかった。
僕はただ、いつまでも暗い灰色の空を眺めていた。

「・・・恭子、おまえ、幸せになったんやな。よかったなあ。
俺も幸せになったで・・・。
恭子、俺も恭子との思い出、永遠に忘れへんから。
これからもずっと幸せでいるんやで・・・。」
僕は目頭が熱くなり、涙が溢れるのをこらえるしかなかった。

寝室から洋子が起きだしてきた。

「なにしてるん?」

「ん・・・星を見てるんや。」

「星なんか見えへんやん。」

「・・・いや、見えるんや。・・・そう、見えるんや。」

「変なの。・・・でも涼しくて気持ちええなあ。」

「・・・そうやなあ・・・。」

「なんかあったん？」

「いいや、ちょっと寝られへんかっただけや。」

洋子はくすくすと笑うと、

「あの葉書の人のこと考えてるん？」と聞いた。

僕はテーブルに地図と葉書を、並べておいたままにしてあることを思い出した。

きっと洋子はそれを見たのだろう。僕は洋子を見つめ、微笑みながら、

「・・・もう、遠い遠い昔の話や。」と言った。

洋子は、両肘をベランダの手すりにのせ、僕の顔を覗き込むように見つめると、

「思い出、大切やもんね。」と言った。

その時、僕には彼女の言葉が、恭子からのメッセージのように聞こえた。

僕は洋子の肩を抱きよせると、

「葉書の彼女、今幸せなんやそうや。僕等もたくさん楽しい思い出つくろうな、幸せでいような。ずっと永遠に。」と言った。

そう言うと洋子は「変なのぉ」と言い、けらけらと笑った。

「さあ寝よか。」

僕は洋子の肩を抱くと、そっと部屋へ戻した。そして振り返り、もういちど空を見上げた。
暗い灰色の空の下をヘッドライトの川が流れていた。

＊＊＊　あとがき＊＊＊

僕が書く小説というのは大体いいかげんです（笑）。なんとなく思い付きで書き始め、なんとなくできてるという感じです。
大阪は、僕が学生時代を過ごし、その後長く勉めていたところです。そして、小豆島はバイクツーリングの好きなコースです。まあ、この辺を舞台にして・・・なんていう感じでいいかげんに書き始めました。
登場人物の仁史という名前は学生時代の友達の名前に近い名前にしたのですが、
なんとなく思い付いただけで、特に彼を書いた訳ではなく、モデルは書いた僕に他ならないと思います。
恭子は、なぜ「恭子」なのかというと、え～っ、いいかげん！って思われるかもしれないですけど、ちかくにあった雑誌に深田恭子ちゃんが乗ってたから。（笑）

ただ、恭子のモデルは深田恭子ではなく、実はちゃんといるのです。昔、よく大阪城公園に遊びにいった女の子がいます。その子は僕よりはかなり若くて、単なる友達だったのだけど、瀬戸内沿岸出身の彼女の、飾らない性格とやさしい言葉が好きでした。もちろん彼女とこの話のような体験をしたわけじゃないのだけれど、「恭子」がその彼女から派生していることは確かだと思います。僕は瀬戸内の自然や雰囲気が好きです。バイクでもよく走りにいきます。

そのあたりからこの話を作りました。この話のテーマは、「思い出、大切やもんね」です。

なんしか、ややこしかったのは、今物語を書いてる自分は、先ほどまで舞い込んできた葉書のことで１０年前の夏の自分を思い出し、その中で１０年前の秋の自分は、その年の春の自分を思い出している、みたいなところかなあ。笑

あと、最初仕事から帰ってきた自分は、つい先ほどの自分だから、出来事だけをうす～く書いています。人間って、今起こっていることとか、今自分がいる場所の事って、見てるようであんまり見えてないと思います。よく見えるのはあとになって、あの日は。。とか、あの時は。。って感じで、客観的に思い出す時だと思うん。もちろん、そのときよく見てたわけじゃないから、誇張や演出があったりもするのかなあ。

それから、地名には実名を出していますが、地理的には正確なわけではありません。主人公は１０年前のことを思い出し、書いた僕も１０年前の記憶、小豆島に行ったときの思い出とイメージでいいかげんに書きました。（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0596a/

ここから永遠に

2010年10月21日22時38分発行